

夢見る者の夢

— ヨセフの夢の文学的構造 (創世記 37 章 5 節～11 節) —

柊 暁 生

I プロローグ

ヨセフ物語は創世記 37 章から始まり 50 章まで続く長い物語である。その冒頭にどうしてヨセフが兄弟から憎まれ、エジプトに売られて行くようになったかの説明がある。37 章によれば、一つは父のヤコブ (=イスラエル) がヨセフを他の兄弟よりも愛したからというものであり (3～4 節)、他の一つはヨセフの見た夢が原因となっているというものである (6 節～11 節)。どちらにも共通するのは兄弟のヨセフに対する憎しみであるが、伝承の問題を問わず、テキストを共時的に見れば、ヨセフに対する兄弟の憎しみの理由づけは父の偏愛よりも、ヨセフの見た夢の方が大きいと考えられる。実際、ヨセフ物語全体においてヨセフの夢の物語 (37 章) は重要な位置を占め、あとに続く夢の解釈の物語 (40 章, 41 章) と密接な関係がある¹。37 章, 40 章, 41 章は編集の最終段階において鎖のように繋がる一連の物語として構成されており、その文学的構造の解明は全体を通して見なければならぬが、ここではヨセフ物語の発端となる 37 章のヨセフの夢の物語を取り上げ、一對の夢の文学的様式とその構造の連関を探り、ヨセフの夢が持つ意味を考えてみたい。

II ヨセフの夢の物語 (37 章 5 節～11 節) — 全体的構造 —

(1) ヨセフが見た二つの夢は、創世記 37 章 5 節～11 節に述べられている。第一の夢は 5 節から 8 節にかけての記事で、畑地において兄弟の収

¹ C. Westermann, *Genesis 37-50* (BKAT I/3; Neukirchen 1982) 28-29 頁参照。

穫した束が、ヨセフの収穫した束にひれ伏したという話である。第二の夢は9節から11節にかけての記事で、天上において太陽、月、11の星がヨセフにひれ伏したという話である。それぞれの夢に対して、兄弟の反撥があり、父の反応がある。ヨセフの二つの夢は、文学的な観点から見れば相似的な構造を形成している。ヨセフが自分の見た夢を話すとそれに対して兄弟、あるいは父が疑問を投げかけて対応するという構成である。

第一の夢（5節～8節） A ヨセフの言葉（6～7節）

 B 兄弟の言葉（8節）

第二の夢（9節～11節） A' ヨセフの言葉（9節）

 B' 父の言葉（10節）

(2) 二つ夢の内容は異なっている。しかし、二つの夢の意味は同じである。それはどちらの夢の中にも出て来る動詞「ひれ伏す」によって明らかかなように、兄弟（+父母）がヨセフに対してひれ伏すということである。

ヨセフの二つの夢（37章5節～11節）の文学的枠組みは次のとおりである²。

第一の夢（5節～8節） はじめ 5節「ヨセフは夢を見た」

 wayyaḥalōm

 おわり 8節「彼の言葉（ダバル）ゆえに」

 w^eal-d^ebaraw

第二の夢（9節～11節） はじめ 9節「彼はまた他の夢を見た」

 wayyaḥalōm

 おわり 11節「その言葉（ダバル）を守った」

 'et-haddabar

² ヨセフの第一の夢と第二の夢の形態論的、構造論的比較については R. Pirson, "The Sun, The Moon and Eleven Stars: an Interpretation of Joseph's Second Dream", *Studies in the Book of Genesis* (BETL 155; Leuven 2001) 561-562 頁参照。

III 第一の夢の物語 (37章5節～8節)

(1) 5節から8節にかけてのヨセフの第一の夢の物語には、兄弟のヨセフに対する憎悪がインクルジオとして文学的構造を形成している³。5節は「ヨセフは夢を夢見てそれを兄弟に話した」という書き出しで始まるが、それに続いて兄弟が「さらにますます彼を憎んだ」⁴と記されている。同じことが8節の終わりでも言われており、ヨセフが夢の内容を兄弟に話すと、兄弟が「ますます彼を憎んだ」と書かれている。「彼の夢のゆえに、彼の言葉のゆえに」という説明が8節ではあるものの、同じ文言が二度、ヨセフの言葉と兄弟の言葉を囲い込み、インクルジオを形成している⁵。

5節b「彼らはさらにますます彼を憎んだ」

8節b「彼らはさらにますます彼を憎んだ」

(2) ところで、この兄弟のヨセフに対する憎しみはすでに4節で述べられている。「兄弟は父がどの兄弟よりも彼を愛するのを見て、彼を憎み、穏やかに彼と話すことができなかつた」。その具体的な理由は3節の「イスラエルはどの子供よりも彼を愛して……彼に長そでの着物をつくってやった」ということによる。他方、5節以降で兄弟がヨセフを憎む理由は、ヨセフの見た夢の内容によるとされている。その夢は兄弟の束がヨセフの束にひれ伏すというものである。

それゆえ、4節と5節～8節で同じ「憎む」(サネー)という動詞が使われてはいるが、兄弟がヨセフを憎む理由は4節と5節～8節では異なる

³ G. W. Coats は5節から8節にかけての構造が(1)一般的導入、(2)夢語り、(3)夢に対する返答、(4)最終結果の4段階の構成要素から成り立っていると見る。G. W. Coats, *Genesis, with an introduction to narrative* (FOTL vol.1 Michigan 1983) 269頁。

⁴ この5節bは70人訳聖書には欠落している。von Rad は5節bはおそらく間違いであろうと言う。G. von Rad, *Das erste Buch Mose/Genesis* (ATD 2-4; Gottingen ¹²1987) 284頁。C. Westermann は付加とする。上掲書24頁。

⁵ H. Seebass は Ringkomposition を形成すると言う。H. Seebass, *Genesis III Josephsgeschichte* (37, 1-50, 26) (Neukirchen 2000) 21頁。

る。一方は父のヨセフに対する偏愛によるものであり、他方はヨセフの見た夢によるものである。一般的に、3～4節はJ資料に属し、5～11節はE資料に属すると言われている⁶。

(3) 5節と8節で動詞「憎む」(サネー)は、「さらに」(オード)という単語をともなって、共時的な観点よりすれば、物語の進展によって4節よりもさらに憎しみが増大することを言い表わしている。ただ、ヨセフの第二の夢(9節～11節)ではもはや動詞「憎む」(サネー)は用いられておらず、その代わりに動詞「妬む」(カナー)が使われている。憎しみは妬みへと変わる。兄弟のヨセフに対する心情は、「憎む」(4節)から「ますます(増す増す)憎む」(5節, 8節)へと深まり「妬む」(11節)に転ずる。

「彼らはさらにますます彼を憎んだ」(5節, 8節)と二回言われているが、5節ではヨセフが夢を見て、それを兄弟に話したために「彼らはさらにますます彼を憎んだ」と言うだけで、その夢の実際の内容は記されていない。何故兄弟がヨセフを憎んだのかは読者にはわからない。兄弟の憎しみの理由が書かれていない⁷。それに対して、8節で「彼らはさらにますます彼を憎んだ」と言われる場合、その時には兄弟はヨセフから夢の内容を聞いて知っているわけである⁸。それゆえ、8節にはヨセフが見た夢のゆえに、彼の言葉のゆえにという説明が付け加えられている。

彼らはさらにますます彼を憎んだ、彼の夢ゆえに (前置詞, アル)
彼の言葉ゆえに (前置詞, アル)

(4) ここで「ますます」と訳されているのは「増し加える」(ヤサフ, ysf)という動詞である。この動詞は創世記30章24節で、ヨセフの名前の由来の説明のために用いられている⁹。「彼女は名をヨセフと名づけて言った。『主が私に、(さらに)他の子を増し加えられますように』」の「増し

⁶ J. Skinner, *Genesis* (Edinburgh 1980) 444-445頁, 他参照。

⁷ H. Schweizer, *Die Josefsgeschichte Teil I: Argumentation* (Tübingen 1991) 110頁参照。

⁸ H. SchweizerがBHSを援用して言うように、8節のテキストに問題はないものと考えられる。前掲書12頁参照。

⁹ ヨセフの名前の語源説明が妥当であるかどうかの問題についてはふれない。

加える」(ヤサフ)がそれである。ところが、創世記37章5節、8節では、この動詞「増し加える」(ヤサフ)が兄弟のヨセフ(ysf)に対する憎しみが増し加わる(ysf)ことを言うために用いられている。ヨセフの名前の由来を説明する動詞が、皮肉にもヨセフへの憎しみの増幅を言い表わすために使われている¹⁰。

この兄弟のヨセフに対する憎しみのインクルジオ(5節b、8節b)の中にあるのは、ヨセフが自分の見た夢を語る言葉と、それに対する兄弟の反応の言葉で、それぞれの導入句は次のとおりである。

6節a「彼(ヨセフ)は彼らに言った」wayy'omer 'alêhem

8節a「兄弟は彼(ヨセフ)に言った」wayy'omrû lô 'eha'w

III-A 第一の夢(6節b~7節)

ヨセフが自分の見た夢の内容を兄弟に話す言葉は、まず第一に「聞いて下さい」¹¹という呼びかけで始まり、次に「私が夢見たこの夢を」と続き、それから三つのヒンネー(「見よ!」)の導入によって夢の内容が述べられ¹²、最後に「私の束にあなたがたはひれ伏した」という結びで終わる。

(1)「私が夢見たこの夢を」(ḥalam + ḥalôm)

「私が夢見たこの夢を」という翻訳は、名詞「夢」と動詞「夢見る」が関係代名詞(アシェル)によって結ばれている構文を直訳したものである¹³。名詞「夢」には指示代名詞「この」が付加されている。名詞「夢」+動詞「夢見る」の用法は、10節の父の言葉の中にもあらわれ、「あなたが

¹⁰ この不定詞の用法については、P. Joüon, *Grammaire de l'hébreu biblique* (Rome 1923) 124 c 参照。

¹¹ 「聞く」の命令形がḥlm(「夢」)の語根と結びつく例についてはG. W. Coats, *From Canaan to Egypt* (Washington 1976) 13頁参照。

¹² 「ヒンネー」(hinneh)に「私は夢見る」(ḥlm)が続く例については注15参照。他にJ.-M. Husser, "Songe", *Supplement Dictionnaire de la Bible*, 1499参照。

¹³ ヘブライ語ではḥalam ḥalôm(夢を夢見る, rêver un rêve, dream a dream)と重疊的であるが、アラム語ではḥelem hazah(夢を見る, ダニエル4章2節)である。

夢見たこの夢」と一人称が二人称に変わるだけで同じ構文である。

6 節 b 「わたしが夢見た＋ところの（関係代名詞）＋この夢」

10 節 b 「あなたが夢見た＋ところの（関係代名詞）＋この夢」

ところが、9 節のヨセフの第二の夢においては、動詞「夢見る」＋名詞「夢」という順序での用法が 2 回出て来る。これは 5 節冒頭の「ヨセフは夢を夢見た」と同じ順序であり、関係代名詞なしである。ヨセフの夢の物語の中での「夢を夢見る」文法的構成は以下のとおりである¹⁴。

| | | |
|--------|--------------------------|------|
| 5 節 a | 彼は夢見た（動詞）＋ヨセフ＋夢（名詞） | 3 人称 |
| 6 節 b | 夢（名詞）＋この＋関係代名詞＋私は夢見た | 1 人称 |
| 9 節 a | 彼は夢見た（動詞）＋さらに（オード）＋夢（名詞） | 3 人称 |
| 9 節 b | 私は夢見た（動詞）＋夢（名詞）＋さらに（オード） | 1 人称 |
| 10 節 b | 夢（名詞）＋この＋関係代名詞＋あなたは夢見た | 2 人称 |

(2) 三つのヒンネー（hinneh, 「見よ！」）

ヨセフの見た夢の内容は、翻訳するのに難しい三つのヒンネー（hinneh, 「見よ！」）の導入によって語られている¹⁵。三つの夢の内容を直訳すると以下のようになり、三段階で夢の中の出来事が進展するさまが読み取れる。第一の夢全体のリズムは、この三つのヒンネーによって支配されている¹⁶。

①ヒンネー＋私たちは＋束ねていた＋束を＋真中で＋畑の

②ヒンネー＋起き上がり＋私の束が＋そうして＋立った

¹⁴ 他に 8 節で名詞「夢」（ḥalôm）の複数形が出て来る。この複数形は一般化、非限定を意味する。P. Joüon, 上掲書 136 j。

¹⁵ 動詞「夢見る」（ḥalam）＋ヒンネー（hinneh）によって夢が語られるのは創世記 28 章 12 節, 37 章 6 節, 7 節, 9 節, 41 章 1 節, 5 節, 士師記 7 章 13 節。名詞「夢」＋ヒンネー（hinneh）によって夢が語られるのは創世記 40 章 9 節, 16 節, 41 章 22 節。動詞「夢見る」（ḥalam）の分詞＋ヒンネニ（hin^enî）の組み合わせは創世記 41 章 17 節。D. Vetter, “hinne, siehe” *THAT* Band I, 506 参照。Simon Legasse, “Songes-Rêves”, *Dictionnaire de Spiritualité*, vol.8 1055, M. Ottoson, “chalam”, *TDOT* vol.IV, 427 頁。J.-M. Husser, 上掲書 1499 参照。

¹⁶ “Josephs Darstellung des Traums in rhythmischer, verbal bestimmter, fast tanender Sprache, durchzogen von dem mehr fachenhinneh.” C. Westerman 上掲書 29 頁。

③ヒンネー＋周りに来て＋あなたがたの束が＋ひれ伏した＋私の束に

最初に、「私たち」という言葉によってヨセフを含む全ての兄弟が言われ、次に「私」であるヨセフが問題となり、最後に「あなたがた」とヨセフを含まない兄弟のことが述べられている。第一段階において兄弟の分裂はないが、第二段階においてヨセフの束が起き上がり、立つという事態になり、第三段階において兄弟の束がヨセフの束の周りに来て、ひれ伏す¹⁷という結果、弟が兄たちより優位な立場に立つという兄弟間の上下関係の逆転現象がおこる。ちょうど、ヨセフの父ヤコブが兄エサウの長男の権利を奪い取ったように。

(3) 束 ('lmmh) と束ねる ('lm)

名詞「束」('lmmh, アルンマー)は動詞「束ねる」,「結ぶ」('lm, アラム)に由来する単語であり、両者は同じ語根の言葉である。名詞「束」(アルンマー)が使われているのは旧約聖書中5回のみであり、そのうちの4回がここで用いられている¹⁸。あとの1回は詩編126の6である。「種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう」。この詩編の1節には「私たちは夢見る者のようだった」と夢が肯定的な直喩として出て来る¹⁹。捕囚からの帰還を歌ったと言われるこの詩編は、ヨセフの第一の夢の解釈に大きな鍵となるものと思われる。

「束」がどんな種類の農作物をさすのか明白ではないが、詩編126で「束」は収穫の喜びを表現しており、創世記37章の夢の中の「束」も収穫の喜び、その時を含蓄していると考えてよいであろう。すなわち、ヨセフ物語の最初の夢が「束」であるのは、象徴的に物語の最後の結末が喜びによって収束することを暗示している²⁰。

¹⁷ この二つの動詞の時制は過去における継続を意味する。J.-M. Husser, 上掲書1499。P. Joüon, 上掲書118 n 参照。

¹⁸ 「束」('lmmh)の複数形'lmmîm(男性形, 7節a)は一般的な意味合いで使われ、複数形'lmmôt(女性形, 7節b, 詩編126:6)は特別な束を意味する。P. Joüon, 上掲書90 e 参照。

¹⁹ M. Ottoson, 上掲書432頁。

²⁰ J.-M. Husserは、束の夢はヤコブの子供たちがエジプトへ旅することのモチーフを告知するものであると言う。上掲書1500。

動詞「束ねる」(アラム)は強調形(ピエル)分詞で、強調形の用法は旧約聖書の中でここだけである。

(4) ひれ伏す (hwh II)

動詞「ひれ伏す」(hwh II)はヨセフの夢の物語(創世記37章)において、3回出て来る。そのうちの2回はヨセフが自分の夢を語る言葉の中で用いられており、あとの1回は父の言葉の中で使われている。

①第一の夢：「あなたがたの束が私の束にひれ伏す」(2人称男性複数形)

②第二の夢：「太陽、月、11の星が私にひれ伏す」(男性分詞複数形)

③父の言葉：「私(父)、母、兄弟があなたにひれ伏すのか」(不定詞)

ヨセフの二つの夢の内容は異なっている。しかし、両者に共通して言われ、父によって確認されるのが「ひれ伏す」という行為である。二つの夢は動詞「ひれ伏す」によって一つのものとしてされている²¹。ただ、穀物の束が倒れるとか、傾くとか言うことはあっても、ひれ伏すという言い方はしない。太陽、月、星がひれ伏すというふうにも言われない。夢の中で束や太陽、月、星がひれ伏すと語られているのは、比喩的に弟であるヨセフが家族関係の中で上位に立つことを言いあらわしている²²。

(5) 畑 (sdh)

第一の夢に登場する「束」の舞台は「畑」(sdh, サデー)である。「束」の収穫の場所、畑は地上にある。これに対して、第二の夢に登場する太陽、月、星の舞台は天上である。第一の夢の場所が地となっているのに対し、第二の夢の場所は天となっている。ヨセフの二つの夢の舞台は「地と天」であって、二つで一つの天地=世界を構成している。ヨセフの夢が二つで一つであるというのは、動詞「ひれ伏す」が二つの夢の両方に出て来るといふ明白な根拠の他に、こうした場所の設定からも理解できる。

創世記37章2節によれば、ヨセフとその兄弟は羊の群れを飼う牧畜の

²¹ 象徴的な夢はしばしば繰り返しによって強調される。他に創世記41章、ダニエル書2-3章、7-8章、列王記上9章2節。M. Ottoson, 上掲書431頁参照。

²² ここでヨセフの夢が傲岸不遜であるとか、権力志向であるとかいう問題についてはふれない。

仕事をしていることになっている。ところが、第一の夢によるとヨセフとその兄弟は畑で収穫物の束を束ねる作業をしている²³。彼らはおそらく基本的には小家畜飼育遊牧を職業としていたと考えられるが²⁴、夢において畑での穀物の収穫作業が問題となるのは、後にヨセフがファラオの夢を解き明かし、飢饉の対策として豊作の時に収穫した穀物、畑の食糧を備蓄することと関連するためであろう²⁵。「彼（ヨセフ）はエジプトの国にできた七年の食糧をすべて集め、その食糧を町々に与えた。町のまわりにある畑（サデー）の食糧を町の中に与えた」（創世記 41 章 48 節）²⁶

(6) 音韻 ḥlm 「夢」と 'lm 「束ねる」

ヘブライ語で「夢」は ḥlm（ハローム）、「束ねる」は 'lm（アラム）で、二つの単語には l と m の音が入っており、どちらも lm の音韻で終る。単語の最初の子音も ḥ（ヘー）と '（アレフ）で、両者ともに喉音で始まる。ヨセフが第一の夢を語る言葉の中には、名詞「夢」（ḥlm, ハローム）、動詞「夢見る」（ḥlm, ハラム）がそれぞれ 1 回、動詞「束ねる」（'lm, アラム）が 1 回、同根の名詞「束」（'lmmh, アルンマー）が 4 回で、重要な二つの単語、「夢」（ḥlm）と「束ねる」（'lm）の lm の音韻が夢の中で響き合っている。

III-B 兄弟の言葉（8 節）

ヨセフが語る夢の内容を聞いて、兄弟は激しく彼に反撥する。彼らは夢の解釈を必要とせず、ただちにその夢の意味をさとる²⁷。そして、強い

²³ 創世記 26 章 12 節にはイサクが種を蒔き、百倍の収穫をすることが述べられている。

²⁴ 創世記 37 章 13-14 節、46 章 32-34 節参照。

²⁵ von Rad はこの意見に同意しない。上掲書 287 頁。

²⁶ 他に、創世記 47 章 24 節も畑（サデー）と食糧との関係を言う。

²⁷ 多くの注解者がこの点に言及する。C. Westerman 上掲書 28-29 頁, J.-M. Husser, 上掲書 1498, Simon Legasse, 上掲書 1055, H. Seebass, 上掲書 21 頁参照。イスラエル人でない人々の象徴的な夢のほとんどは解き明かしを必要とするが、イスラエル人の象徴的な夢は常に説明を必要としないと M. Ottoson は述べる。上掲書 430 頁。

調子でヨセフに疑問を投げかける。兄弟の言葉は七語で述べられている短いものであるが、二つの並行する疑問の強調構文はヨセフに対して強い拒否を示している。「あなたは本当に私たちを支配するのか。あなたは本当に私たちを統治するのか」

直訳的に並行文を記せば以下のようになる。

- ①疑問詞(ハ)＋「支配する」(不定詞)＋「支配する」(3人称男性単数形)＋我々の上に(前置詞, アル)
- ②疑問詞(イム)＋「統治する」(不定詞)＋「統治する」(3人称男性単数形)＋我々の内に(前置詞, ブ)
- (1) 疑問詞＝ハ(ha)＋イム('m)

同義語、「支配する」と「統治する」で構成される並行文の始めに、疑問詞のハ(ha)とイム('im)があり、疑問が表現されている。最初の疑問はさらに不定詞独立形で強められ、反語的な意味を持ち、兄弟はヨセフの夢に対して反感を抱き、「お前は我々を支配するというのか、お前は我々を統治するというのか、まさかそんなことはないだろう」という不可能性のニュアンス(nuance d'improbabilité)²⁸を表現している。ヨセフの第二の夢に対する父の言葉(10節)にも、並行文の始めに疑問詞のマー(mâ)とハ(ha)があり、兄弟の言葉と同じくヨセフに対して強い反語的な疑問を呈している。

- (2) 同義語＝「支配する」(mlk)＋「統治する」(mšl)

兄弟のヨセフに対する言葉は、二つの同義の動詞、「支配する」(＝「王となる」mlk, マラク)と「統治する」(mšl, マシャル)でもって、ヨセフが兄弟の上に立って治めることが強調されている²⁹。「支配する」(mlk)と訳した動詞は「王となる」とも訳される動詞で、名詞「王」(mlk, メレク)と同根である³⁰。「支配する」と「統治する」の二つの動詞は基本的には上に立って治めるという一つの意味をあらわしている。

²⁸ P. Joüon, 上掲書 123 f.

²⁹ この点に関して、A. Wenin, “Le temps dans l’histoire de Joseph (Gn 37-50)” *Biblica* 83 (2002) 40 頁参照。

³⁰ H. Schweizer はこの類音重疊法に関連して、J. Grimm (1873) の翻訳を引用する。“königen, königen willst du über uns?” 上掲書 59 頁。

ヨセフ物語の中で「支配する」(=「王となる」)という動詞はこれ以外にはもはや出て来ないが、「統治する」(mšl)という動詞は創世記45章26節にあらわれる。「ヨセフはなお生きていてエジプト全国の統治者です」の「統治者」は「統治する」(mšl)の分詞形である。

「支配する」,「統治する」といった動詞は使われていないが,創世記41章40~44節では,ヨセフがファラオに次いで実質上国を治める者であるということが言われている。「あなた(ヨセフ)はわたし(ファラオ)の家を(前置詞,アル「~の上に」)治めなさい。わたしの民はみなあなたの言葉に(前置詞,アル「~の上に」)従うだろう。わたしはただ王座にいるというだけあなたより偉大なのだ」(40節),「わたし(ファラオ)はあなた(ヨセフ)をエジプト全国の上に(前置詞,アル「~の上に」)おく」(41節)³¹。

兄弟の言葉の中には,ヨセフが夢を話した時に使われていた「ひれ伏す」という動詞は用いられていない。おそらく故意にこの動詞を用いることは避けられたのであろう。兄弟にとってヨセフに「ひれ伏す」ことは赦し難いことだからである。ヨセフにとっては都合のよい夢であるかも知れないが,兄弟にとっては耐えられない夢である。それゆえ,「ひれ伏す」という動詞の代わりに「支配する」,「統治する」という二つの同義の動詞が使われているのであろう。もちろん,こうしたことも兄弟にとっては耐え難いことであり,意味論的には「ひれ伏す」と同義であるが,ヨセフが言った言葉を忌避している点に注目すべきであろう。

(3) 強調形=不定詞+活用動詞

「支配する」(mlk),「統治する」(mšl)の二つの動詞はどちらも不定詞独立形+活用動詞(未完了,2人称男性単数形)で,強調をあらわしている³²。この強調構文は,同じ動詞を二度用いることによって成立する

³¹ 他に41章43,44節参照。45章9節では「エジプト全国の主(アドーン)」。この前置詞アル('l,「~の上に」)は,兄弟の言葉の最初の並行文の最後にも用いられている。「あなたは本当に私たちを(前置詞,アル「~の上に」)支配するのか」(37章8節a)

³² 直訳すれば「治めに治めた」というような日本語訳になるであろうが,ここでは強調をあらわすために「本当に」という言葉を入れて訳す。また,不定詞独立形は強い疑問をあらわす。P. Joüon, 上掲書123f。

が、ヨセフの第二の夢に対する父の言葉の中でもこの用法は一度（「行く」、ポー）使われている。

また、ヨセフの「夢を夢見た」という表現が動詞「夢見る」+名詞「夢」（あるいはその逆）で、同じ語根の言葉を2度繰り返す重畳的な用法に一種の対応関係があると見てもよいであろう。

(4) 音韻=mlk (マラク)+mšl (マシャル)

ヘブライ語で「支配する」は mlk (マラク)、「統治する」は mšl (マシャル)である。8節で mlk と mšl が2回ずつ、強調をあらわすため繰り返されるが、mlk (マラク) と mšl (マシャル) には m と l の音が含まれており、m と l の音韻がリズムカルに響き合っている。

また、並行文の最後はどちらも1人称複数代名詞の“ヌー” (nû, 私たち) で脚韻を踏んでいる。

①あなたは～私たちを支配するのか：アレヌー ('alenû, 私たちの上に)

②あなたは～私たちを統治するのか： バヌー (banû, 私たちの内に)

8節の最後には「彼の夢ゆえに (アル)、彼の言葉ゆえに (アル)」と2回、前置詞アル（「～の上に」）のくりかえしがあり、全体の音調をしめくくっている。

ヨセフの言葉の中では「夢」と「束ねる」、すなわち ḥlm と 'lm の音が響き合うのが認められたが、兄弟の言葉の中では「支配する」と「統治する」、すなわち mlk と mšl の音が響き合うのが認められ、ヨセフの言葉と兄弟の言葉は相互に l と m の音韻が響き合い、共鳴しているのを聞き取ることが出来る。

ヨセフの夢の主要な音韻=ḥlm (夢) + 'lm (束ねる)

兄弟の夢の主要な音韻=mlk (支配する)+mšl (統治する)

IV 第二の夢の物語 (9節～11節)

(1) ヨセフが二度目に見た夢の書き出し (9節) は、第一の夢の (5節) の書き出しと並行的である。ただ「ヨセフ」という名前はなく、その代わりに「他の (アヘル)」と「さらに (オード)」という単語が付加されている。「オード」という単語は第一の夢において2回、「彼らはさらにますます彼を憎んだ」(5節, 8節)というインクルジオの形式で使われ

ているが、第二の夢においても2回、「さらに(オード)夢を夢見た」(9節)と繰り返し用いられている。

9節 a 「彼はさらに(オード)他の夢を夢見た」(3人称)

9節 b 「私はさらに(オード)夢を夢見た」(1人称)

(2) 第二の夢においては、ヨセフが夢を見て、それを「兄弟(+父)に語る(サファル, sfr)」という文言がヨセフの言葉を囲い込み、文学的なインクルジオ(9節~10節)を構成している。

9節 a 「彼はそれを自分の兄弟に語り(サファル), 言った」

10節 a 「彼は自分の父に, 自分の兄弟に語った(サファル)」

しかしながら、70人訳ギリシア語聖書はヘブライ語のマソラ・テキストと異なり、9節に「彼は自分の父に, 自分の兄弟に語った」とあり、10節ではマソラ・テキストにある「彼は自分の父に, 自分の兄弟に語った」という文章は欠落している。マソラ・テキストでは、ヨセフは最初は兄弟に、次に父と兄弟に夢を語ったとなっている³³。ただ、夢の内容が語られるのは、兄弟に対してだけである。これは、第一の夢の「彼らはさらにますます彼を憎んだ」(5節, 8節)というインクルジオにおいて、5節では、ヨセフの夢の内容を知らず³⁴、夢を聞いたというだけで憎んだと言われているのに対し、8節は、夢の内容が語られた後に憎んだと述べられているのにある意味で対応する。

(3) 9節 a では、ヨセフが自分の見た夢を兄弟にのみ語ると書かれているのに対し、10節 a では、ヨセフは自分が見た夢をまず父に語り、そして次に兄弟に語るとされている。なぜ10節 a では「父に」と父が付け加えられているのであろうか。論理的に言えば、9節 a で「父に, そして兄弟に」と述べる70人訳聖書の方が理にかなっていると言えるだろう。

しかし、ヨセフと兄弟、ヨセフと父との関係は異なる。それゆえ、まず兄弟に語り、次に父と兄弟に語るという方が、微妙な家族関係の心理的動向を表現するのにふさわしいと考えられる。ヨセフと基本的に対立するのは兄弟である。そのために、第一の夢の場合のように(6節 a), まず夢を兄弟に語ると記される(9節 a)。ところが、ヨセフが語る夢の

³³ 新共同訳聖書は「今度は兄たちだけでなく、父にも話した」と訳す。

³⁴ H. Seebass, 上掲書 21 頁参照。

中には「太陽と月（父と母）」が登場する。おそらくはそれゆえに、夢を語った後に父に語ることが言われ、その父が今度はヨセフに向かって反応するという連鎖的な進展の様子が組み込まれているのではないか。第一の夢では単に兄弟とヨセフの対立であったが、第二の夢では兄弟とだけでなく、父母をも巻き込んだ家族全体の問題となっている。そのため、ヨセフの第二の夢に対して発言するのは一家の長である父である。ヨセフを咎める父の言葉によって、ヨセフの二つの夢の物語は閉じられる³⁵。ヨセフと兄弟、父の対話の図式は以下のとおりである。

第一の夢：ヨセフ→兄弟， 兄弟→ヨセフ
 第二の夢：ヨセフ→兄弟， ヨセフ→父＋兄弟， 父→ヨセフ

IV-A ヨセフの第二の夢（9節）

(1) ヨセフが語る第二の夢は第一の夢よりも短かい³⁶。ヨセフが話す第一の夢は22語で書かれているが、第二の夢は12語だけである。第一の夢においてはヒンネーが3回、導入句の役割を果たしているが、第二の夢においてはヒンネーが導入句の役割を果たすのは2回である。直訳は以下のとおりである。

①ヒンネー＋私は夢見た＋夢を＋さらに（オード）。

②ヒンネー＋太陽，月，11の星＋ひれ伏した＋私に。

ヨセフの第二の夢はヒンネーによって導入される並行文となっている。第一の夢の内容が三つのヒンネーによって導入されていたのとは違い、第二の夢の内容は②のヒンネーによって導入されるだけである。

(2) ヨセフが夢を語る言葉の書き出しと締め括りは、第一の夢も第二の夢もどちらもほぼ同じである。「私は夢を夢見た」という言葉で始められ、「ひれ伏した」という動詞で締め括られている。この書き出しと締め括りの間に夢の内容が述べられている。但し、導入の言葉は第一の夢が「聞いて下さい」であるのに対し、第二の夢はヒンネーである。

³⁵ 創世記37章も父の嘆きによって閉じられる。

³⁶ J.-M. Husser は第一の夢の方が第二の夢よりも詳しく述べられていると言う。上掲書1499, G. W. Coats, *From Canaan to Egypt* (Washington 1976) 13-14頁参照。

書き出し 第一の夢＝名詞「夢」＋動詞「夢見る」

第二の夢＝動詞「夢見る」＋名詞「夢」

締め括り 第一の夢＝「ひれ伏す」（2人称男性複数形）＋私の束に

第二の夢＝「ひれ伏す」（男性分詞複数形）＋私に

(3) 第一の夢の「束」は地上の植物であるのに対し、第二の夢の「太陽、月、11の星」は上空の天体である。「束」の数は、単数（私の束）、複数（あなたがたの束）と不定であるのに対し、「太陽、月、11の星」の数は $1 + 1 + 11 = 13$ 対 1 と具体的である³⁷。

第一の夢＝「束」 (植物), 畑 (地), 複数：単数

第二の夢＝「太陽、月、星」(天体), (天), $1 + 1 + 11 : 1$

(4) 音韻の観点から言えば、第一の夢のインクルジオには「増し加える」(＝「ますます～する」, ヤサフ, ysf) という動詞があり、第二の夢のインクルジオには「語る」(サファル, sfr) という動詞があり、どちらにも sf の音が入っており、両者は音韻の上でも共鳴し合っている。

第一の夢のインクルジオ

5 節 b 「彼らはさらにますます (ysf, ヤサフ) 彼を憎んだ」

8 節 b 「彼らはさらにますます (ysf, ヤサフ) 彼を憎んだ」

第二の夢のインクルジオ

9 節 a 「彼はそれを自分の兄弟に語り (sfr, サファル), 言った」

10 節 a 「彼は自分の父に, 自分の兄弟に語った (sfr, サファル)」

IV-B 父の言葉 (10 節)

ヨセフの夢に対する父の言葉 (13 語) は、第一の夢に対する兄弟の言葉 (7 語) よりも長い。ただ、両者の文学的構造は酷似している。どちらも並行する二つの疑問詞、兄弟の言葉はハ (ha) とイム ('im), 父の言葉はマー (mâ) とハ (ha) でもって文章が始められている。

兄弟の言葉 ハ (疑問詞) あなたは本当に私たちを支配するのか

³⁷ von Rad は、11 の数について黄道 12 宮 (Zodiac) の 11 の動物の図との関連を見る。上掲書 287 頁。13 という数はヨセフが出世するまでの 13 年を暗示していると考えられる。R. Pirson, 上掲書 561-568 頁, A. Wénin, 上掲書 41 頁参照。

| | | |
|------|----------|---------------------------------|
| | イム (疑問詞) | あなたは本当に私たちを統治するのか |
| 父の言葉 | マー (疑問詞) | あなたが夢見たこの夢は何か |
| | ハ (疑問詞) | 私, 母, 兄弟が本当にあなたのところに行って地にひれ伏すのか |

両者はともに疑問の並行文であるが、その内容は少し異なる。兄弟の言葉は同義的（支配する＝統治する）並行文である。他方、父の言葉はまず一般的に夢に対する疑問が述べられ、次に具体的な夢の内容に対する疑問が言われている。言わば発展的（一般的→具体的）並行文である。父の言葉を直訳的に記せば以下のようなになる。

- ①「何か」(マー, 疑問詞) + 夢 + この + ところの (関係代名詞) + あなたが夢見た
- ②「～か」(ハ, 疑問詞) + 私たちは行く + 私, 母, 兄弟 + ひれ伏す + あなたに + 地に

並行文の①「あなたが夢見たこの夢は何か」という表現は、前述したように第一の夢（6節）の「聞いて下さい、わたしが夢見たこの夢を」と1人称単数が2人称単数に変わり、「聞いて下さい」が「何か」（疑問詞）に入れ替わるだけであとは同じである。

ヨセフ（6節） 「聞いて下さい。私が夢見たこの夢（を）」

父（10節） 「何なのか？あなたが夢見たこの夢（は）」

父の言葉は、ヨセフの第二の夢に対しての反応であるのに、並行文の①はヨセフの第一の夢の最初の文句に相応している。これはヨセフの夢の物語での最初の言葉（ヨセフ）と最後の言葉（父）を文学的に呼応させ、一種の枠組みを形成するためであろう。父がヨセフの第二の夢の発言に対して言及するのは、並行文の②においてである。ここでもヨセフの夢はすぐに理解されており、解釈の必要はないようである。「私とあなたの母とあなたの兄弟が、あなたのところに行って地にひれ伏すというのか」

(1) 私, 母, 兄弟

ヨセフの夢の「太陽, 月, 11の星」を、父は「私とあなたの母とあなたの兄弟」と解釈するが、これは家族全体をあらわしている³⁸。第一の夢

³⁸ J.-M. Husser, 上掲書1500。J. Skinnerはイスラエル全体に対してである

では、ヨセフの兄弟だけが問題となっていたが、第二の夢では父母を含む家族全員が対象となっている³⁹。「太陽、月、星」という宇宙世界の全体と、「父、母、兄弟」という人間家族の全体が対比されている⁴⁰。

「太陽、月、星」という組み合わせは、たとえば創世記1章14節～19節、申命記4章19節、17章3節、列王記下23章5節、エレミヤ書8章2節などに出て来る。創世記1章の天地創造の第4日目の場合、直接には太陽、月とは述べられていず、二つの大きな光る物（大きな方と小さな方）と言われている。おそらくは故意に太陽、月という単語が避けられたものであろう。それは申命記4章19節、17章3節、列王記下23章5節などに述べられている太陽崇拜、月神崇拜、星辰崇拜などの忌避を表現するためであったと考えられる。「あなたは目を天にあげて、太陽、月、星々、すなわち天の万象を見、誘惑されてそれらにひれ伏し (hwh, II), それらに仕えてはならない」(申命記4章19節)。「行って他の神々に仕え、それらにひれ伏し (hwh, II), ……」(同17章3節)。

こうした箇所では、人が太陽や月や星に「ひれ伏す」(hwh, II) = 「拝む」と言われているが、創世記37章9節では、ちょうどその反対に太陽、月、星が人(ヨセフ)に「ひれ伏す」(hwh, II)と述べられている⁴¹。なぜ太陽、月、星が夢の中で譬えとして出て来るのか。

結論から言えば、それはヨセフ物語の中で、夢と時間とが大きなかわりを持っているからではないかと考えられる⁴²。創世記1章14節～19節で太陽、月、星は、昼と夜、日、季節、年を区切るために造られた言われている。昼と夜を区切り、日や月や年を数えるのは、太陽、月、星

と言う。上掲書445頁。死んだ母ラケルの登場は、太陽、月、星が父母兄弟の家族全体を象徴的にあらわすためと考えられる。G. W. Coats, 上掲書14頁。

³⁹ ヨセフの夢は単に兄弟だけの分裂を意味せず、家族全体に亀裂を及ぼすものである。G. W. Coats, 上掲書15頁参照。

⁴⁰ 但し、11の星に対して兄弟が11人とは言われず、11という数字は割愛されている。太陽と月が父と母のいずれに相当するかの問題についてはJ.-M. Husser, 上掲書1501参照。

⁴¹ 詩編148:3では太陽、月、星が主を賛美するようと言われている。

⁴² J. G. Janzen, *Abraham and All the families of the Earth* (ITC, Grand Rapids-Edunburgh 1993) 149頁。A. Wénin, 上掲書41頁参照。

といった天体の運行と密接な関係があるからである。

ヨセフの第二の夢の中に太陽、月、星があらわれるのは、その後のヨセフの夢の解き明かしの中で、3日(40章)、7年(41章)といった日数、年数が出て来る事と大きな関連があると考えられる。夢の中の太陽、月、星はとくに将来の時間を暗示していると見てよいのではないか。夢は未来の出来事を告げるからである。

また、太陽、月、星は、昼と夜、光と闇を分けるところから、その後のヨセフの「闇と光」が織りなす運命を示唆しているとも考えられるし、「夜」は夢の時(40章5節、41章11節)であり⁴³、「朝」は夢の不安からその解き明かしに至る時(40章6節、41章8節)とも推測される。「今日」は、ファラオの臣下が夢を見て、その意味がわからず、顔色が悪いので、ヨセフが夢を解き明かすに至る時であり(40章7節)、給仕役の長がヨセフを忘れていたというあやまちを思い出し、ヨセフがファラオの夢を解き明かすに至る時である(41章9節)。「今日」はヨセフが闇の世界から光の世界へと移行する決定的な時である。

(2) 行く (bo', ポー)

10節の父の言葉、「私とあなたの母とあなたの兄弟が本当にあなたのところに行って地にひれ伏すというのか」の「行く」(bo', ポー)という動詞は⁴⁴、不定詞独立形+1人称複数の強調構文(bô'+nabô')で用いられている。これに接頭疑問詞ハ(ha)がついて「私たちは本当にヨセフに、地にひれ伏しに行くのか、まさかそんなことはないだろう」という反語的意味を含んだ疑問となっている。

この不定詞+活用動詞の強調構文は、父の言葉の中では1回だけであるが、第一のヨセフの夢に対する兄弟の言葉の中では2回あった。この並行文に接頭疑問詞ハ(ha)がついているのは、「あなたは本当に私たちを支配するのか」(8節)の方で、これが父の言葉の「私たちは本当にヨセフに、地にひれ伏しに行くのか」(10節)に対応し、ある意味で兄弟の

⁴³ 他に創世記20章3節、31章24節、列王記上3章5節など。

⁴⁴ ヤコブ(+兄弟)がゴシェンの地に来た時、「私(ヨセフ)に来た(bo', ポー)」(46章31節)、「カナンの地から来た(bo', ポー)」(47章1節)と言う時にも同じ動詞ポー(bo')が使われている。

言葉と父の言葉の枠組を形成していると言えるだろう。

兄弟の言葉（8節）＝疑問詞（ハ）＋（mlk）不定詞＋3人称男性単数形

父の言葉（10節）＝疑問詞（ハ）＋（bo'）不定詞＋1人称複数形

この対応関係を見ると、兄弟の言葉では「あなた」＝ヨセフが主体となって、「私たち」＝兄弟を「支配する＝統治する」ことが言われているのに対し、父の言葉では「私たち」＝父母兄弟の家族が主体となって、「あなた」＝ヨセフに「ひれ伏す」ことが言われている。

(3) ひれ伏す (hwh, II)

ここでの動詞「ひれ伏す」は、動詞「来る」(ボー)の不定詞＋活用形の強調構文と前置詞ル(1^e)＋不定詞(「ひれ伏す」, 合成形)で結びつけられている。動詞「ひれ伏す」はヨセフの夢の物語(37章)の中で3回使われているが、ヨセフ物語が進行する先で、実際に兄弟がヨセフにひれ伏すために3回用いられている⁴⁵。これは明らかにヨセフの夢が暗黙のうちに現実のものとなることを意味している⁴⁶。兄弟はそれがヨセフだとは知らないでヨセフに「ひれ伏す」のである。ヨセフによって意識化された夢は、兄弟によって無意識のうちに実現する。

- ①「ヨセフの兄弟は来て、彼に、地面にひれ伏した」(42章6節),
- ②「彼らは彼のところに来て、地に、彼にひれ伏した」(43章26節)
- ③「そして彼らは、頭をさげてひれ伏した」(43章28節)

⁴⁵ そのうち2回(42章6節, +43章26節)が動詞「来る」(bo')と共に用いられている。

⁴⁶ 誰が誰にひれ伏すのかという問題は、ヨセフ物語の中で一種のライトモチーフであり、イスラエル(＝ヤコブ)もヨセフにひれ伏す(47章31節)が、他方ヨセフもイスラエル(＝ヤコブ)にひれ伏す(48章12節)。このことに言及してH. D. Preussは、E資料では37章7-8節から48章12節にかけて動詞「ひれ伏す」によるクライマックスがあると見る。TDOT vol.IV 251頁。J.-M. Husserはここでの動詞「ひれ伏す」のインクルジオは明白であるとする。上掲書1499。創世記の家族関係の発展の中で「ひれ伏す」行為が皮肉的に——予期に反して——使われていると見るのはT. E. Fretheimである。ヤコブはエサウに(33章3節。27章29節参照), ヨセフはヤコブに(48章12節。37章10節参照), そして最後には兄弟がひれ伏すことをヨセフは拒否する(50章18節。但し, ここでの動詞はhwh, IIではなく, nfl「落ちる」。44章14節参照) T. E. Fretheim, NIDOTTE vol.2, 2556, 43頁。

夢は夢で終わらない。夢は実現する。創世記 40 章, 41 章の夢の解釈の物語では, ヨセフが夢を解き明かし, それが実際に現実のものとなることが記されている。夢を解き明かすことは神によるが(40 章 8 節, 41 章 16 節), ヨセフに神の力が働いて, ヨセフが夢を解き, 夢は現実のものとなる。創世記 40 章では 3 日後, 41 章では 7 年後(+ 7 年後) 夢は現実のものとなる。

しかしながら, 創世記 37 章のヨセフ自身の夢は, すぐには現実のものとはならない。ヨセフの夢が実現するのは, 「これらの事の後」(40 章 1 節), 「二年の後」(41 章 1 節), 「七年の豊作が終り」(41 章 53 節), 「七年のききんが始まった」(同 54 節) といった時間を経過したあとのことである。ヨセフの第二の夢の中で「太陽, 月, 星」があらわれるのは, ヨセフの夢がすぐにではなく, 長い時間の先に実現することを仄めかしていると考えられる。

ヨセフの見た夢が実現するのは, ファラオの臣下, ファラオといった他の人々の夢を解き明かすあとのことである。

(4) 地 ('rṣ, エレーツ)

「ひれ伏す」(hwh, II) という動詞は, 「地に」(アルツァー, 'arṣā) という単語と共に用いられることが多い⁴⁷。人がひれ伏すのは地に対してであるから, そうした表現が慣用となる。父の言葉の最後に「あなたに, 地にひれ伏すのか」とある。ヨセフの第二の夢には太陽, 月, 星が出て来るので, 場所は天上界である。父はヨセフの夢の太陽, 月, 星を父, 母, 兄弟と理解する。そうすると, 父, 母, 兄弟が生きている世界は地上であり, 人は地に「ひれ伏す」のであるから, 父の言葉の中に「地に」という単語が出て来ても不自然ではない。第二の夢の舞台は天上であるが, 夢の現実の舞台は地上であり, ヨセフの夢の物語の中心に「ひれ伏す」ということがある以上, 「地」は重要な意味を持っている。

また, ヨセフの夢の物語は畑(地)の「束」が「ひれ伏す」ことから始まっており, それに呼応するかのようになり, 最後に父の言葉は「地」

⁴⁷ 創世記 18 章 2 節, 24 章 52 節など。H.-P. Stähli, “hwh hist. sich niederwerfen” *THAT* Band I, 531 参照。

に「ひれ伏す」ことで終わっている。含蓄的に「地」がヨセフの夢の物語の枠組みを形成しているとも言えるだろう。

V 兄弟と父 (11 節)

5 節から始まったヨセフの夢の物語は 11 節で終る。その 11 節の最後に意味深長な言葉が書かれている。「兄弟は彼を妬んだが、父はその言葉を(心に)留めた」。兄弟はヨセフの夢ゆえに彼を妬むが、父はヨセフの夢ゆえに彼を咎めながらも、一体この夢は何なのか、本当に私たちはヨセフにひれ伏すのかという強い疑問を持つ。ここで兄弟と父のヨセフに対する反応は分かれる⁴⁸。

兄弟はヨセフの二つの夢に反撥して、彼を憎み、妬む。他方、父はヨセフの第二の夢に対してだけ反応する。父も当然ヨセフに対して不快感を示し、彼を叱責する。しかし、父はヨセフの語った言葉を心に留める(原文は「言葉を守る」⁴⁹)。その意味が自分には了解できないからである。そこには何か隠された意味があるのではないかと考える。言葉(ダバル)の背後に何か秘められた事(ダバル)があるのではないかと思う。そして、それは時の流れの中であって事実、出来事(ダバル)となって開示される⁵⁰。

この「言葉」(ダバル)という単語は、ヨセフの第一の夢に対する兄弟の言葉のあと、8 節の最後でも使われている。兄弟は「彼の夢ゆえに(前置詞, アル)、彼の言葉のゆえに(前置詞, アル)彼をさらにますます憎んだ」。「言葉」(ダバル)が第一の夢の物語の最後と、第二の夢の物語の最後にあり⁵¹、兄弟はヨセフの言葉ゆえに彼をますます憎むが、父はヨセ

⁴⁸ 40 章では生と死、41 章では農作と飢饉が対立する。

⁴⁹ “šamar 'et-haddabar”, 70 人訳聖書は diatēreō と訳す。ルカ福音書では、母マリアが「これらの事(rēma)を心に留めていた(diatēreō)」(2 章 51 節)と記されている(2 章 19 節では sumballō)。

⁵⁰ 創世紀 37 章で神は何も語らず、神への言及もない。C. Westermann 上掲書 30 頁, J.-M. Husser 上掲書 1500 参照。

⁵¹ 但し、8 節のダバルは複数、11 節のダバルは単数。ダバルが夢と同義的に用いられることについては、M. Ottoson, 上掲書 427 頁参照。

フの言葉を心に留める。父の心は内に向かうが、兄弟の心は外へ向かう。

兄弟の反応はすでに見たように、まずヨセフに対する憎しみから始まる。第一の夢で兄弟は「ますます」彼を憎むが、第二の夢では「憎む」という動詞は使われず、「妬む」という動詞が用いられている⁵²。憎悪は嫉妬へと変貌する。兄弟の心の底に渦巻くこの暗い感情が、ヨセフ物語を展開する機縁となっている。それゆえ、兄弟はのちにヨセフがやって来るのを見て次のように言う。

VI 夢見る者の夢

「みろ(ヒンネー)、あの夢見る者⁵³がやって来るぞ。さあ、あいつを殺して穴に投げ入れ、悪い獣が食ったと言おう。そしてあいつの夢がどう(マー)なるか見てみよう」(37章19～20節)

この兄弟の最後の言葉は読者にとっても同じである。一体ヨセフの夢はこれからどうなるのであろうか。結論から言えば、前述したように、ヨセフの夢の中で3回言われていた「ひれ伏す」という行為は、現実には3回行なわれ、夢は実現する。しかし、兄弟はヨセフの夢がどうなるか見ようと言いながら、実際に夢が成就することを知らない。兄弟はエジプトでヨセフと出会い、彼にひれ伏すが(42章6節)、それがヨセフとは気づかなかったからである。「ヨセフは、兄弟であると気づいたが、彼らはヨセフとは気づかなかった」(42章8節)。またヨセフ自身も夢を忘れており、その時になって夢を思い出す(42章9節)⁵⁴。

ところで、37章20節で「悪い獣が彼を食ったと言おう」と書かれており、兄弟はヨセフが悪い獣に食べられたように見せかけ、父はヨセフが実際に食べられたと信じ込む(37章33節)。なぜここで「食べる」(アカ

⁵² 使徒言行録7章9節(zēloō)参照。兄弟の嫉妬については拙稿、「旧約聖書における人間の嫉妬」、『聖書における感情』(高柳俊一編 リトン 2001)所収33-60頁参照。

⁵³ 直訳は「夢の主人」(ba'al haḥalōmôt)

⁵⁴ J.-M. Husser は、ヨセフはその時点になってはじめて夢を理解したと思われると言う。上掲書1500参照。

ル、'kl) という動詞が出て来るのであろうか。それはヨセフの夢の物語、及び夢の解き明かしの物語と密接な関係があるためであると考えられる。「食べる」という動詞は、ヨセフの夢の物語の中で象徴的な意味を持っているのである。

まず、ヨセフの第一の夢の中で「束」が「ひれ伏す」と言われている。前に述べたように、「束」は収穫作業で束ねられる農作物である。それがどんな種類のものであるか明白ではないが、当然、人間の食糧となる食べられるものであろう。

次に、40章でファラオの臣下の給仕役の長と料理役の長の二人が登場するが、給仕役という単語は動詞「飲ませる」から出来ており、料理役という単語は動詞「(パンを) 焼く」から派生している。両者は飲むことと食べること、飲食に関連し、二つで一つである。料理長は、夢の中に鳥があらわれ、籠から食べ物を食べるということを語るが(17節)、ヨセフは、それは鳥が彼の肉を食べることを意味していると言う(18節)。夢が現実のものとなるのはファラオの誕生日の宴会(ミシュテー、動詞「飲む」の派生語)の時であった(20節～22節)。かくして給仕長は生き残るが、料理長は死ぬこととなる。

最後に、41章のファラオの夢は「食べる」と密接に結びついている。彼の第一の夢は、7頭の醜い痩せた雌牛が、7頭の美しい肥えた雌牛を「食べる」(アカル、'kl) というものである。ヨセフは彼の第二の夢(7つの痩せた穂が7つの太った穂を呑み込む)と合わせて、ファラオの夢が意味するのは、7年の豊作のあとに7年の飢饉が到来することで、豊作は忘れられて、飢饉が国を滅ぼすことであると解き明かす。それゆえ、豊作の時に穀物を集め、食糧として備える必要があると言う。ファラオはヨセフを王に次ぐ者として全国の上に(前置詞、アル、41章41節、43節)、長(42章6節)としておいた。ヨセフは豊作の時、「町の周囲にある畑の食糧(オーケル、'kl)をその町の中に納めさせた」(41章48節)。

ヨセフ物語があらたな展開をみせるのは42章である。ヤコブはエジプトに穀物があると知って、息子たち(ヨセフの兄弟)に穀物を買に行かせる。兄弟はエジプトに穀物を買に行き、そこでヨセフと出会うがそれがヨセフであるとは知らず、彼にひれ伏す(42章6節)。

このように見ると、ヨセフの最初の夢に出て来る「束」は、「食べる」ことと密接に関連し、41章の「穂」や「穀物」とも意味上の関連があり、その後の物語の展開に大きな役割を果たしていると考えられる。最後の時に収穫され、束ねられる「束」は、その最初の時に種が蒔かれており、徐々に意味論的な成長を遂げてゆく。初めの夢にすべては胚胎している。

VII エピローグ

夢見る者の夢はどうなるのか。ヨセフにとっては栄光ある夢で始まった創世記37章は、ヨセフがエジプトに売られて行くという事態へと急転直下し、「私は子供のところへ、嘆きつつ、陰府(シェオール)へと下って行こう」という父の言葉で絞め括られる⁵⁵。

しかし、ヨセフはその後、徐々に穴(37章)、牢獄(39章、40章、41章)といった闇の世界から脱出する。それはファラオの二人の臣下と、ファラオの二つの夢の解き明かすことによってである。夢はヨセフを夜の世界に引き込んだが、夢の解き明かしは彼を昼の世界へと導き出す。

40章で、ヨセフは牢獄の中で二人のファラオの臣下の夢を解く。夢は現実のものとなり、一人は生き、一人は死ぬという結果になる。さて、ヨセフはどうなるのか。それはまだわからない。

40章を引き継いで、「二年の後、ファラオは夢を見た」という書き出しで41章は始まる。ヨセフはまだ、牢獄の中である。しかし、ファラオが夢を見てもその夢を解く者がいなかったのも、ヨセフを思い出した給仕長によって牢獄から出される。ヨセフはファラオの前に呼び出され、彼の夢を解く。こうしてヨセフはようやく夢の現実化への一步を歩む。

ヨセフは自分の夢を語ることによって、悲劇的な人生の幕開けをするが、他者の夢を解くことによって、自分の夢が実現する方向へと向かう。ただ、夢の解き明かしは神によるとヨセフは繰り返して言う(40章8

⁵⁵ しかし、最後には父の嘆きは喜びに変わる。父はカナンの地からエジプトに、ヨセフのところへと実際に「下って」行くことになるからである(45章9節)。

節，41章16節）。

ところが，37章のヨセフ自身の夢に対しては，その夢の解き明かしはなかった⁵⁶。夢の解き明かしがなくても理解できるからである。しかし，37章では夢の実現もないのである。40章，41章では夢が解き明かされて，3日後，7年後に夢は現実のものとなる。しかし，37章のヨセフの夢が現実のものとなるのはずっと後のことである。

ヨセフは2回夢を見る。今まで見てきたように，夢は二つで一つである。それは神がこれからしようとしていることを予告している。ヨセフはのちに次のように言う。「ファラオの夢は一つです。神がこれからしようとすることをファラオに告げられているのです」（41章25節，28節）。

⁵⁶ 夢の解き明かしの有無の問題については，J.-M. Husser, 上掲書 1500, G. W. Coats, 上掲書 14-15 頁参照。